

『堪忍記』と『武家諫忍記』の比較

望月 良親

はじめに

本稿の課題は、『武家諫忍記』と『堪忍記』の比較を行ない「大名評判記」の起点と考えられる『武家諫忍記』の位置付けを日指すことである。

『堪忍記』の諸本の研究は深沢秋男²⁾によってなされている。松平文庫本『堪忍記』（福井県立図書館蔵）と内閣講談所本『堪忍記』（国立公文書館内閣文庫蔵）・内閣学問所本『堪忍記』（国立公文書館内閣文庫蔵）の諸本の比較を行なっている。検討の結果以下のような諸本の関係があるとしている。

原資料へ
A 『堪忍記』 ↓ 松平文庫本
内閣講談所本

B 『堪忍記』 へ
内閣学問所本

AとBの二系統に分かれ、B系統の方が後に成立したと試案を提示している。そこで、この『堪忍記』の諸本の関係を踏まえて、『武家諫忍記』との関係を考える。具体的には、「序」の比較・記載されている大名の数量的考察・本文の具体的内容の比較を行なう。

一 「序」の比較

1 『武家諫忍記』の「序」

『武家諫忍記』の「序」は、加賀市立図書館聖藩文庫本（以下聖藩文庫本とする）の記述より以下の特徴が明らかになっている。³⁾ ①強烈な神国意識があること。②浪人によって書かれていたこと。③秀頼切腹より当代がはじまったこと。④国々所々において「制法」「政道」の違いが大きいので見聞したことを著したものであること。

2 『諫忍記』の「序」

次に『堪忍記』の「序」をみていこう。『堪忍記』の「序」は松平文庫本に

はなく、内閣講談所本と内閣学問所本の『堪忍記』には「序」がある。次の史料は、内閣講談所本と内閣学問所本の『堪忍記』の「序」である。この二書で相違がある点は、内閣学問所本の『堪忍記』の「序」が括弧で示されている。

それ侍ハ、高下によらず、立身の心心懸不宣（不宣）ハめづらしからず。侍の出世たる故也。其外物を下夕（くた）さるゝはかりを、よきと申にても無之候。たゞ常に御情ふかく、万御仕置（仕置）正路にましますこそ、御身のためもよけれ。しかれども、まつたいていは堪忍也。よき御あてかいを、よろしき御主と申候。ケ様ニ申せはよくニふけるにて候へ共、又さ様（左様）にても御座なく候。たとへハ、上たる上よりよろしき御あてかい、何にても不斗御拝領候は、何程か満足ニ可被思召候。其御満足は、欲にふけたる御満そくに有間敷候。たゞありかたごとく恭、御まんそく可有（在）候。又あしき事の御迷惑も、心持同前にて候。上ニにくむ所、下につかふまつる事なかれ。其上よりなし下る善悪を御身に思召あてられ、御なさけふかゝるへし。主人小利たりといへども、大利の様ニ御被成、御吟味つよし。尤小利にて候へ共、あまり利つよき御仕置にて候。殊主、とくふんなど思召し（おほしめし）、わたくしなる事ニ被仰付、誠天のあたへももつたいなき事ニ候。能奉公仕御氣ニ入候ハ、立身も被仰付、御見立も可在候。下ろうのとへニ、君をおもふも身をおもふと哉らん。其上めうがのためと申、少も油断ハ不仕候。然れども（然とも）、奉公人ハ皆主人よりさせたる奉公と見へ申候。子細ハ、よき奉公人も主人の御氣ニ入らぬおゝし。是ハ玉みかかゝされハひかりなしと哉覽、本意なき事也。（中略）また、侍の作法として、へつらう事なく、てくろうせず、正直なる侍ハ、もきどうものなとゝとりなし、御氣に入らず、ケ様（かやう）にもものゝすりちかふ事を申ハ、むかしハ刀脇指能きるゝを用（用て）、鍔ハよくとをるを吟味して所持致し（いたし）候。（中略）兵法といふものハ、にてくふものか、やいてくふ物か、いまたたべしらすといふもの、おほくあるへし。具足などねすみのくふもしらされさほう、皆其家職をうしのか（うしなふ）御代の風儀、不及是非候。家老出頭人、其外、御用人寄合、領地仕置の談合まちゝ也。先入札を以て御徳のおゝきかたへ付へしと相究、おもひゝゝゝの入札、先今時分入さるものハ侍也。知行とらせてついへにて候。御為おもひのもの共斗を残シ置、其外ハ扶持はなす入札。（中略）万事よこしまをくわへ、国を治る事、あやうき

のミと、愚者被存候き。

『堪忍記』の「序」には「侍」のことについて書かれている。それは、「それ侍ハ、高下によらず、立身の心懸不宜ハめづらしからず。」とあるように、「侍」が如何に「上」に仕えるかということが中心である。「まつたいは堪忍也。よき御あてかいをよろしき御主と申候。」とあり、「堪忍」が最初のことであり、「堪忍」がよいことを求めるのはただ欲のためではなく、「たゞありかたくとく恭、御まんそく可有(在)候」としてある。また良い奉公人でも主人が気に入らないことが多いとしている。これは、主人が玉を磨かないので光らないのと同様で、「本意なき事也」としている。大名に仕える侍は主人次第であるということの意味している。次に、「刀脇指」・「鑓」の例を取り上げて、以前はよく切れるものなどを使っていたが今となってはそのようなことをする者は多くないと記載されている。兵法を知らず、煮て食べるものか、焼いて食べるものかまったく知らない者が多いとしている。そして、領地仕置のことが書かれており、「御おおもひのもの共斗を殘シ置」て、「百姓からしほりとる人札ハ色々あり」として、百姓から多くを絞り取るうとしてしている。最後にこのように身勝手にしては、「万事よこしまをくわへ、国を治る事、あやうきのミと、愚者被存候き。」として痛烈に批判をしている。

3 小括

以上、聖藩本『武家諫忍記』の「序」と内閣講談所本・内閣学問所本『堪忍記』の「序」をみてきた。この二書を比較して小括としたい。まず、『武家諫忍記』にはあつた強烈な神国意識を『堪忍記』中ではみることができなかった。秀頼切腹より当代がはじまったということも書かれていない。『堪忍記』の「序」で特徴的なことは君臣の関係を中心に書かれている点である。『武家諫忍記』の「序」にも家臣の仕置のことが書かれている。「家臣ノ仕置ノ善悪是ヲ記ストイヘトモコトタクハ不詳故ニ荒方ヲ記ナリ」といったように詳しくはないがおよその家臣の仕置の様子が書かれているとしている。神国意識などのことは『堪忍記』中の「序」には記述されていないが、君に如何に臣が仕えるのかという点においては「序」の共通点は見出せる。

二記載大名の検討 表参照

次に、記載されている大名の検討を行なっていきたい。

松平文庫本と内閣講談所文庫本・内閣学問所本の『堪忍記』の比較は深沢秋男の研究よりみていく。⁵⁾ 松平文庫本『堪忍記』に掲載されている大名数は一〇六人であり、内閣講談所文庫本・内閣学問所本『堪忍記』の掲載大名は一〇六人である。松平文庫本『堪忍記』にしか記載されていない大名は、稲葉能登守信通以下一二人である。⁶⁾ 内閣講談所本・内閣学問所本にしか記載されていない大名は、相馬大膳亮・金森出雲守重頼・毛利甲州秀元宰相・松平大膳亮・小出対馬守諸大夫・松平主殿・日根織部・嶋津但馬守である。これらの記載されていない大名の特徴は現時点では判別しがたい。

次に、聖藩文庫本『武家諫忍記』の大名数をみていこう。聖藩文庫本『武家諫忍記』には二〇〇人の大名が記載されている。『堪忍記』の大名数とは一〇〇人ぐらい違うことが分かる。試みに明暦元年の「武鑑」をみてみると二一九人の大名が記載されていた。⁷⁾ おおよそこの時期の大名数は二〇〇人前後であったことが確認できる。⁸⁾ それでは、この記載されている大名とされていない大名にはどのような差があつたのであろうか。

内閣講談所本『堪忍記』と聖藩文庫本『武家諫忍記』の大名一覧を作成して、表にまとめた(後掲表参照)。表の見方としては、聖藩文庫本『武家諫忍記』の大名の名前の横にある「○」は、内閣講談所本『堪忍記』掲載の大名と同一人物であり、「●」は代が替つたことを示している。内閣講談所本『堪忍記』の大名の名前の右横にある数字は、それぞれ聖藩文庫本『武家諫忍記』の大名の番号と対応している。どちらにも記載されている大名は、同一人物は四一人で代が替つた大名は四六人である。内閣講談所本『堪忍記』にしか記載されていない大名は、断絶したものが六人、断絶していないのが六人であった。断絶していないのに聖藩文庫本『武家諫忍記』に記載されていない大名の特徴をみていくと、阿部備中守正成侍従・黒田甲州長興・毛利甲州秀元宰相・松平大膳亮・嶋津但馬守は本藩が別に存在しており支藩であるということが特徴である。阿部備中守正成侍従・松平大膳亮以外の黒田甲州長興・毛利甲州秀元宰相・嶋津但馬守が記載されていないことは、松平文庫本『堪忍記』にも記載されていないので、共通性をみることが出来る。聖藩文庫本『武家諫忍記』にしか記載されていない大名は、尾張・紀伊・水戸の「三家」の子・左馬頭源綱豊卿・右馬頭源綱吉卿などがいる。永井日向守大江尚清以降の大名は石高が4万石以下である。おおまかには石高で区切られており、石高によつて記載されるか、されていないかが決まっていることが窺える。

三内容の検討

最後に具体的に『堪忍記』・『武家諫忍記』の本文の内容の検討を行なってきた。視角としては、『堪忍記』と『武家諫忍記』で同一の大名と『堪忍記』と『武家諫忍記』で代が替わった大名を取り上げて、語句レベルでの比較ではなくて、内容の異同について検討を行なっていく。松平文庫本『堪忍記』と内閣講談所本・内閣学問所本『堪忍記』と聖藩文庫本『武家諫忍記』と養賢堂本（宮城県立図書館養賢堂文庫所蔵）『武家諫忍記』の四本の比較を行なう。史料中に傍線を引いており、傍線の意味は以下の通りである。

一（棒線）四本『堪忍記』二本、聖藩本・養賢堂本『武家諫忍記』とも同内容。
（波線）『堪忍記』二本が同内容。

二（二重棒線）内閣講談所本『堪忍記』と聖藩本・養賢堂本『武家諫忍記』が同内容。

一（点線）聖藩本『武家諫忍記』と養賢堂本『武家諫忍記』が同内容。

（二重波線）内閣講談所本『堪忍記』と養賢堂本『武家諫忍記』が同内容。

1 同一の大名―尾張義直の比較

尾張義直の比較から行なっていくこととする。松平文庫本『堪忍記』と内閣講談所本『堪忍記』を比べる。

・松平文庫本『堪忍記』

六拾貳万石 ●尾張大納言様 義直卿 名護屋

跡目相違なし。知行、地方にて正保元年より四ツ免。在江戸詰、百石に五人扶持宛。五百石より上八扶持なし。国役百石に老人。役御手前ならず。世間不受不施、江戸童、池上ノ御門徒也と申候。

・内閣講談所本『堪忍記』

六拾貳万石

一尾張大納言義直様。子ノ御年。御前様、浅野紀伊守娘。御息兵衛頭。辰ノ年

宰相。領国尾州、たし二、美濃、三川、信濃ニあり。生国伏見。居城名古屋。

家中跡目相違なし。地方にて正保元年ニ四ツ免。在江戸百石ニ五人扶持、五

百石以上扶持なし。国役百石ニ老人つゝ。御手前不成、世間不受不施。江戸童申ハ、池ノ上ノ門徒かとわらい申候。御紋葵ノ丸、御馬印金のかさ、黒か

きりさき。〔御旗地、白三ヶ一上黒、内二白き御紋。竿先黒ヒラ、内二御紋付。御馬印、赤地大四半に、白き御紋。使者ノ指物黄シナイ。番指物金ノ五本ハレン。〕家老、成瀬隼人、竹腰山城、瀧川豊前、寺尾左馬之助。

※注「」は小字書入れ。

松平文庫本『堪忍記』に書かれていることは、全て内閣講談所本『堪忍記』にも書かれていることが確認できる。松平文庫本『堪忍記』に書かれている項目としては、石高、大名名前、居城、跡目、年貢率、扶持、国役、宗教のことである。内閣講談所本『堪忍記』に追加された情報としては、息、官位、旗地、竿先、馬印、指物、家老の情報が増えられる。次に聖藩文庫本『武家諫忍記』と比較する。

・聖藩文庫本『武家諫忍記』

一尾張大納言源義直卿

御内室浅野紀伊守息女 御紋葵

本国、参州、尾州一ヶ國居城名護屋本知六拾一万九千五百石、但諸地ノ運上課役カ、リ物新地開外ニ廿萬石余有之、凡年貢所納所々不同有ナラシ六ツ半高下有、家中へ古侍地形ヲ下ス、小知新参侍ニハ蔵前ニテ四ツナラシ、在江戸ノ年百石ニ付五人扶持、并ニ摸合ヲ渡ス、五百石以上無扶助ナリ、国役百石ニ付一人宛 諸侍跡目無相違、国獸鳥魚菜薪材木生物口多シ、国部文類曰豊饒ニシテ民安シ人剛強ナレトモ直ナリ、南面ヲウケテ生物安シ、土地平ニシテ上地ナリト云々、城本海邊西南平城用害ヨシ城下甚繁昌ニ自由ヨシ、米穀生払モツトモヨシ、家老成瀬・竹腰・瀧川・寺尾、但シ竹腰智臣ト云々

内室、生国、領地、居城の情報は内閣講談所文庫本『堪忍記』と聖藩文庫本『武家諫忍記』で共通している。息、官位、旗地、竿先、馬印、指物の情報は聖藩文庫本『武家諫忍記』にはない。大名自身に関する情報は減り、紋、本国、家老の子、秀忠の弟、運上課役、年貢、民の人柄、地味の情報が追加される。『堪忍記』と聖藩文庫本『武家諫忍記』の違いの特徴としては、將軍家との繋がり、領地の仕置に関する情報が増えることが指摘できる。最後に養賢堂文庫本『武家諫忍記』との比較をする。

・養賢堂文庫本『武家諫忍記』

了之歳、御内室浅野紀伊守女、御紋葵、御馬印金之笠二黒キ切サキ
本國參河、生國山城伏見、征夷大將軍家康公之七男、秀忠公之御舍弟也、居城
尾州名護屋、濃州・信州・參州之内加ル江州ニモ少領有、惣高六拾壹万九千五
百石、新地大分有、諸運上課役懸物外ニ貳十萬石余有、米穀生括共ニ所々少宛
違有、凡他ニ比メハ上々也、年貢所納上ニ同シ、□シ六ツ余家中へ大概地形ヲ下
ス、小身者或ハ新參侍ハ蔵米、但シ正保元年ヨリ四ツ坪シニシテ與ルモ有、在
江戸ノ年百石ニ付五人扶持、外ニ摸合ヲ渡ス、蓋五百石以上ハ無扶持也、国役
百石ニ付一人宛諸士跡目無相違昔ハ御手前不足之由、今ハ古ト云、三百石以上
馬之飼料ヲ下ス、人ニ依テ百石取モ馬ヲ持、家士風俗治ル、諸芸ヲ専ラハケム
譽レ有侍多シ、国豊饒ニシテ民不窮故ニ其相不匹者多シ、国ニ禽獸魚柴薪有、
木曾領諸材木甚多シ、其外領分之所々地厚シテ万倍ヲ生スル、城地之方角西ニ
海有北東遠山惣々空地スクナシ、城下國之西南木曾川之流、北東沼ヲ構ヘテ堅
固之地也、甚繁昌シテ自由叶フ、家老成瀬五万石居所犬山也、竹腰三万石屋敷
構計也、寺尾、山風

四本に共通しているのは、大名名前・居城・石高・年貢率・扶持・国役のこ
とである。『武家諫忍記』二本に共通しているのは、紋、本国、家康の子、秀忠
の弟、運上課役、年貢、民の人柄、地味の情報である。最初の行の「子之歳」
が内閣講談所本『堪忍記』と同じであり、聖藩文庫本とは違う点である。この
記述は講義で扱った『武家諫忍記』では池田家本以外はすべてであることが確認
できる。「子之歳」といった記述は尾張・紀伊・水戸の三人だけに確認でき外
の大名の記述にはみられない。また、池田家文庫本では「家老成瀬・竹腰并寺
尾・瀧川等竹腰知臣トス」という記述があり、内閣講談所本『堪忍記』の「但
シ竹腰智臣ト云々」という記述は共通性がみられる。他の諸本にはこの記述は
ない。あとは『武家諫忍記』中に内容に関する異同はない。聖藩文庫本と養賢
堂文庫本では、養賢堂文庫本の方には、家士の情報、地味の情報が増加されて
いることがわかる。以上から、『堪忍記』と『武家諫忍記』の大きな相違点とし
ては、『武家諫忍記』は『堪忍記』と比べると大名家・藩への関心が強くなつて
いることがわかった。

2代が替った大名―酒井忠勝・酒井忠直の比較

まず、『堪忍記』二本の比較を行なう。

・松平文庫本『堪忍記』

拾貳万三千石 酒井讚岐守殿 忠勝 小浜
物成四ツ。国役強シ。米払悪シ。常番しげく。物ことせはしく。武道の沙汰
もなく。家中風儀悪シ。湯立飯台所より渡。下々ひさのふしたす。□式部以
来無頼の悪しき主人。下々ノ下。

・内閣講談所文庫本『堪忍記』

(拾貳万三千石)

一 酒井讚岐守忠勝侍従。居城若州小浜、越前之内つるかも取。物成り四つな
らし。国役つよし。米払悪敷。常番しげく。物毎せはしく。武道の沙汰一円な
く。家中風義(風儀)悪敷。立出。天下せまく。(せはし)。在江戸あしく。湯
立食台所出。下々ひさのふしたす。あしき事るいなし。主人。下々也。
紋けんかたはみ。旗赤。竿先ニ金出ル。馬印黒鳥毛ノ棒。番指物、赤地四半白
キ井筒。御前相応院娘分。家老、林村作兵衛、三浦七兵衛。

尾張義直の場合は松平文庫本『堪忍記』に書かれていたことは、内閣講談所
文庫本『堪忍記』全て書かれていたが、酒井忠勝の場合では、全ては書かれて
いない。「□式部以来の無頼」という部分であり、具体的な名前が省かれている。
ここから、松平文庫本にあったことをそのまま記載するのではなく、取捨が行
なわれていることが分かる。松平文庫本の『堪忍記』では、尾張義直の場合と
違う書かれている項目は、家中の風儀、大名自身の評判の情報が増加している。
松平文庫本と内閣講談所文庫本の違いでは、尾張義直の場合と同様の項目の増
加がみられる。

・聖藩文庫本『武家諫忍記』

一 酒井修理太夫源忠直

内室松平河内守女 紋劔カタハミ

本國參河、生國武州讚岐守忠勝ノ男ナリ、居城若州小濱越前下野ニモ少領アリ、
本知拾貳萬三千石、新地運上課ヤクカ、リ物等都合拾七万五千石余アリ、
米、コク生括共ニ中、年貢所納六ツ七ツ坪シ五ツ七八分家中へ四ツ成、在江戸
ノ年摸合銀ヲワタス、父忠勝ノ時代ヨリハ家ノ作法諸事心安シ、国ニ禽獸着
柴薪アリ、土地上ナリ、城下静ニテ物事自由叶フ、國家ノ仕置中ナリ、城本

国ノ北海際ナリ、家老酒井・三浦

『堪忍記』と聖藩文庫本『武家諫忍記』の共通点は、大名名、居城、石高である。内閣講所所本『堪忍記』と同じ点は、内室、紋、家老の項目である。

・養賢堂文庫本『武家諫忍記』

一酒井修理大夫源忠直

内室松平河内守女、紋劔カタハミ

本国參河、生国武州讚岐守忠勝之二男也、居城若狭小濱越前下野近江ニモ少領アリ、本知十二万三千石、新地運上課役掛り物等都合十七万五千石、有余也、米コク生弘共二中、年貢所納六ツ七ツナラシ五ツ七八分家中エ四ツ成、在江戸之年模合銀ヲ渡ス、父忠勝ノ時代ヨリハ家ノ作法諸事心安シ、国ニ禽獸肴柴薪アリ、土地上也、城下静ニテ物事自由叶フ、国家ノ仕置中也、城本国ノ北海際ナリ、家老酒井・三浦・林野

四本の共通なのは、大名名、居城、石高である。『武家諫忍記』の二本では、家老の名前が一人増加していることと領地が近江にあるという記述以外の内容上の相違点は見出せない。外の『武家諫忍記』では、「出頭之者ニ鶴田・早川」と池田家文庫本にはあり、対馬本には「越前下野近江ニモ少領アリ」という記述と家老の林野名前が記載されていないことが内容上の相違点である。以上のように代が替ったものも基本的には同一大名の場合と同じく書かれている項目自体は変わっていない。ただし、「父忠勝ノ時代ヨリハ家ノ作法諸事心安シ」といったように、前代のことを参考にして、『堪忍記』を参考にして書かれた可能性もある。

3 小括

以上、同一大名。代が替わった大名の二つの視角から『堪忍記』と『武家諫忍記』の関係をみた。両者に共通するのは、『堪忍記』より『武家諫忍記』の方が領地の位置に関する情報が増えていることが分かった。尾張義直の場合であると、將軍家殿関係の記述が『堪忍記』より『武家諫忍記』では増加していた。

他にも聖藩文庫本と養賢堂文庫本では、聖藩文庫本の方が大名家、藩への関心が強くなっていた。尾張義直では、聖藩文庫本と養賢堂文庫本の違い顕著であったが、酒井忠直の場合では、ほとんど記述は変わらなかった。このことは、

大名または巻によって書き手の規準が違っていることを表していると考えられる。

おわりに

以上のように『堪忍記』と『武家諫忍記』の関係をみてきた。最後に、『堪忍記』と『武家諫忍記』の関係をまとめ、『武家諫忍記』諸本の関係を考察したい。

「序」の比較では、『堪忍記』と『武家諫忍記』では、如何に臣が君に仕えるかという点で共通項が見出せた。また、本文の具体的比較では、『堪忍記』と『武家諫忍記』では、尾張義直の場合は大名名・居城・石高・年貢率・扶持・国役の項目で共通していた。酒井忠勝・忠直の場合では、大名名・居城・石高の項目が共通していた。この二つを合わせると、大名名・居城・石高が『堪忍記』・『武家諫忍記』で共通していることがわかる。だが、寛永二〇年（一六四三）の時点で、『堪忍記』をみなくとも大名の名前、受領名、家紋、領地高、居城地、家老といった項目は既に、「武鑑」が出版されており、著者自身が調べなくても一〇万石以上の大名の情報比較的容易に手に入れることができた。この点では、『堪忍記』を参照していたかは分からないが、尾張義直でみたように「子ノ御歳」といったような記述もみられ、これは他の本をみている可能性も否定できないが、『堪忍記』を参照していた可能性もあるのではなからうか。

『武家諫忍記』諸本の関係としては、尾張義直からの検討だと以下のような関係になる。

↓聖藩文庫本『武家諫忍記』

↓養賢堂本『武家諫忍記』他4本

↓池田家本『武家諫忍記』

酒井忠勝・忠直の場合であると以下の関係がみえてくる。

↓聖藩文庫本『武家諫忍記』：対馬本『武家諫忍記』

↓養賢堂本『武家諫忍記』他3本

↓池田家本『武家諫忍記』

以上、まとめると『堪忍記』との関係からみると、聖藩文庫本系（聖藩文庫本・対馬本）、池田家本系・養賢堂文庫本系（養賢堂文庫本・村上文庫本・興讓

表 聖藩文庫本『武家謙忌記』と内閣講談所文庫本『堪忌記』の大名一覧

聖藩文庫本 『武家謙忌記』	聖藩文庫本 『武家謙忌記』	内閣講談所文庫本 『堪忌記』	同一人物	代替わり	備考
1 尾張大納言源義直卿	107 松平伊賀守源忠勝	1 尾張大納言義直		1	
2 同中納言源光義卿	108 金森長門守藤原賴直	2 紀伊大納言頼宣		3	
3 尾伊大納言源頼房卿	109 永井日向守大江尚清	3 水戸中納言頼房		5	
4 同宰相源光貞卿	110 井伊兵部少輔藤原直	4 酒井讃岐守忠勝侍從		40	
5 水戸中納言源頼房卿	111 内藤飛騨守藤原忠種	5 堀田加賀守正盛		52	
6 同陸奥守源光國	112 九鬼孫次郎藤原後男隆昌	6 松平伊豆守信綱侍從		61	
7 左馬頭源綱重卿	113 太田備中守源資宗	7 阿部豊後守忠快		59	
8 右馬頭源綱吉卿	114 馬場主膳正平忠春	8 阿部對馬守重次		41	
9 保科肥後守正之	115 諏訪因幡守源忠恒	9 伊井掃部守直孝中將		22	
10 松平越後守源光長	116 松平市左衛門直次	10 越前守相忠昌		11	
11 松平越前守源光通	117 牧野佐渡守源親成	11 松平陸奥守忠正		15	
12 松平出羽守源直政	118 松平美作守源定房	12 佐竹修理大夫義隆侍從		29	
13 松平右京大夫源頼重	119 真田伊豆守源野氏信	13 上杉彌正定勝少将		27	
14 松平大千代管領後男頼利	120 松平備後守源恒元	14 南部山城守重直		47	
15 松平陸奥守藤原忠宗	121 秋月佐渡守大藏利吉	15 丹羽左京重長(長重力)		46	
16 松平大隅守源光久	122 堀丹後守藤原直吉	16 内藤備力		67	
17 細川六丸源氏後男頼利云	123 一柳源物源直興	17 保科肥後守正之少将侍從		9	
18 松平右衛門佐源光之	124 酒井日向守源忠能	18 酒井宮内忠俊		38	
19 松平安芸守源光成	125 朽木兵部少輔源頼綱	19 松平越後守光長御位少将		10	
20 松平大膳大夫大江綱廣	126 織田山城守平信尚	20 松平出羽守直政侍從		12	
21 松平丹後守藤原光茂	127 大村因幡守源純長	21 酒井河内守		39	
22 井伊玄蕃頭藤原直隆	128 新庄陸奥守藤原直時	22 上井遠江守		49	
23 松平新太郎光政	129 小出伊勢守藤原吉親	23 福築美濃守利正		56	
24 松平相模守光仲	130 土岐山城守源頼行	24 井上河内守正利諸大夫		84	
25 藤堂大学頭藤原高次	131 西尾丹後守源忠照	25 安藤右京重長諸大夫		25	
26 松平阿波守源光隆	132 木下淡路守豊臣利貞	26 高力摂津守忠房諸大夫		103	
27 上杉掃部守藤原實勝	133 木下右衛門大夫豊臣俊長	27 水野監物忠吉諸大夫		89	
28 松平土佐守忠義	134 遠藤備前守藤原常季	28 水井信濃守尚政		53	
29 佐竹修理大夫源義隆	135 小笠原土佐守源直安	29 藤堂大学守高次侍從		25	
30 有馬松千代源氏後男頼利	136 万川土佐守藤原直忠	30 小松中納言		14	
31 森内記源長継	137 松平将監源忠照	31 松平新太郎光政少将		23	
32 松平式部大輔源忠次	138 相良遠江守藤原長武	32 本多内記正勝四品		34	
33 松平大和守源綱隆	139 土屋兵部少輔源利直	33 松平相州光中		24	
34 本多内記藤原政勝	140 植村右衛門佐源家貞	34 松平阿波守忠英侍從		26	
35 松平下総守源清良	141 藤田信濃守源重洋	35 松平土佐守忠義侍從		28	
36 松平肥前守源定行	142 織田内記源直次	36 松平肥前守定行侍從		36	
37 小笠原右近将監源忠直	143 堀美作守菅原親昌	37 松平安芸守光成侍從		19	
38 酒井左衛門藤原忠治	144 九鬼兵部少輔藤原隆季	38 松平長門守輝茂少将		20	
39 酒井雅楽頭源忠清	145 酒井大学頭源忠朝	39 松平右京大夫		13	
40 酒井修理大夫源忠直	146 土方河内守源雄次	40 京極刑部高和諸大夫		83	
41 阿部伊豫守安部利重	147 岩城伊守守平直隆	41 小笠原右近大夫忠政諸大夫		37	
42 立花左近将監源直茂	148 三浦志摩守平安次	42 小笠原信濃守尚政諸大夫		42	
43 本多能登守藤原忠義	149 分部伊賀守藤原嘉高	43 松平右衛門佐忠之侍從		18	
44 奥平美作守平忠昌	150 宗対馬守平義貞	44 寺次兵衛晴忠		-	正保四年断絶
45 松平越中守源定重	151 松平備前守源高綱	45 鍋島信州勝茂侍從		21	
46 丹羽左京大夫藤原光重	152 水野備後守源元綱	46 立花左近		42	
47 南部山城守源重直	153 石川若狭守源経良	47 有馬中將(忠頼)		30	
48 戸田采女正藤原氏信	154 増山兵部少輔藤原元	48 中川内膳久盛		60	
49 土井大炊頭源利重	155 丹羽式部少輔源氏定	49 細川肥後守光尚		17	
50 水野日向守源勝貞	156 太閤土佐守源増親	50 堀尾陸奥乗秀少将		16	
51 松平淡路守菅原利次	157 秋元但馬守藤原朝朝	51 森内記長継侍從		31	
52 堀田上野介直正信	158 保科越前守源正景	52 松平鶴松		32	
53 水井信濃守大江尚政	159 市橋下総守藤原政信	53 松平越中守四品		45	
54 京極丹後守源高国	160 桑山修理亮藤原一玄	54 水野作人		65	
55 真田右衛門源野氏信	161 細川豊前守源興隆	55 板倉高防守重宗侍從		97	
56 福築美濃守源重正卿	162 五郎淡路守平盛勝	56 京極丹後守高広侍從		54	
57 小笠原信濃守源長次	163 内田長十郎藤原正繁	57 亀井能登守慈正諸大夫		101	
58 大久保加賀守藤原秀(季カ)任	164 松平出雲守源直治	58 古田兵部重經(恒力) 諸大夫		-	慶安元年断絶
59 阿部豊後守安部忠秋	165 堀田備中守紀正俊	59 小笠原忠政守諸大夫		106	
60 中川山城守源久清	166 京極主膳正源高直	60 伊達遠江守秀宗侍從		64	
61 松平伊豆守源信綱	167 井桐右見守源貞昌	61 松平式部大夫忠次四品		32	
62 牧野飛騨守源忠成	168 久留嶋信濃守源清通	62 水戸三才		-	細川忠興、隠居願、正保二年死去
63 本多下総守藤原俊次	169 太田原備前守藤原正清	63 伊藤大和守		80	
64 伊達大膳大夫藤原宗利	170 堀田正藤原包周	64 小出大和守吉幸諸大夫		91	
65 水野出羽守源忠胤	171 土方備中守源雄豊	65 福築淡路守諸大夫		-	慶安元年断絶
66 松平丹波守源光重	172 小堀備中守源政之	66 戸田左門		48	
67 内藤藤刀藤原忠興	173 井上筑後守源政清	67 松平丹波守		66	
68 松平飛騨守菅原利明	174 遠山信濃守藤原友貞	68 岡部美濃守定勝諸大夫		75	
69 戸沢能登守平忠茂	175 伊藤信濃守藤原長貞	69 内藤豊前守諸大夫		93	
70 松平山城守源忠国	176 堀田前守藤原有輝	70 牧野右馬允四品		62	
71 松浦肥前守源頼信	177 立花和泉守源種長	71 石川主殿諸大夫		90	
72 安藤對馬守源重貞	178 溝口土佐守源政勝	72 本多能登守		43	
73 相馬長門守勝(義カ)胤	179 谷助十郎藤原徳廣	73 真田伊豆守		55	
74 加藤出羽守藤原泰貞	180 加藤内藏助藤原明友	74 奥平美作忠昌四品		44	
75 岡部美濃守藤原直勝	181 一柳右衛門源直好	75 阿部備中守正成侍從		-	断絶せず
76 仙石越前守藤原政俊	182 佐久間備中守勝義	76 仙石越前守正俊		76	
77 淺野内匠頭源長直	183 牧野新一郎源後男武成	77 淺野内匠長忠		77	
78 脇坂中務少輔藤原安吉	184 織田信濃守平長成	78 淺野因幡守		85	
79 有馬左衛門佐藤原康純	185 織田豊前守平長定	79 秋田河内守俊秀(季カ) 諸大夫		88	
80 伊藤大和守藤原直久	186 酒井備中守源忠解	80 松平大和守		39	
81 福築能登守源重信通	187 吉木甲斐守丹治重兼	81 青山大膳		98	
82 松平周防守藤原康政(ママ)	188 戸田伊賀守藤原忠治	82 松平山城守忠勝		70	
83 京極吉助近江源氏佐々木	189 西郷若狭守源延貞	83 松平岡防守諸大夫		82	
84 井上河内守源正利	190 建部内匠頭源政長	84 加藤出羽守泰貞諸大夫		74	
85 淺野因幡守源長治	191 前田右近大夫菅原利豊	85 本多下総守安正諸大夫		63	
86 松平若狭守源康信	192 北条久太郎平氏宗	86 菅沼左近定芳諸大夫		-	断絶せず
87 本多越前守藤原利長	193 高木主水正源正盛	87 山崎甲斐守諸大夫		-	明暦二年断絶
88 秋田安房守安部盛季	194 池田又八郎源房重時	88 水谷伊勢守勝隆		105	
89 水野監物源忠貞	195 山口但馬守多良直隆	89 大久保加賀守諸大夫		58	
90 石川主殿頭源昌勝	196 小出平次藤原氏後男有宗	90 黒田甲州長興		-	断絶せず
91 小出大和守藤原吉英	197 伊丹大隅守藤原政勝	91 松平内膳守諸大夫		197	
92 青山因幡守菅原宗俊	198 松平佐渡守源良尚	92 津輕土佐守		100	
93 内藤豊前守藤原信照	199 板倉内膳正源重親	93 相馬大膳亮		73	
94 溝口出雲守源直直	200 森川出羽守源重信	94 戸沢左京正成諸大夫		69	
95 松平但馬守源直富		95 金森出雲守頼朝四品		108	
96 松平和泉守源乗久		96 毛利甲州秀元宰相		-	断絶せず
97 板倉阿波守源重郷		97 脇坂淡路守諸大夫		78	
98 青山大膳亮菅原幸利		98 本多石見守		87	
99 松平主殿頭源忠房		99 有馬左衛門佐		79	
100 津輕越中守藤原信政		100 本多飛騨守守成重諸大夫		102	
101 亀井能登守藤原忠正		101 松平大膳亮		-	断絶せず
102 本多飛騨守藤原忠昭		102 松平若狭守		86	
103 高力左近大夫平隆信		103 小出對馬守諸大夫		129	
104 松平遠江守源忠樹		104 松平主殿		99	
105 水谷伊勢守藤原勝隆		105 日根織部		-	明暦二年断絶
106 小笠原忠政源忠知		106 堀津但馬守		-	断絶せず

注: ○は同一大名、●は代替わりした大名。

内閣講談所文庫本 『堪忌記』	同一人物	代替わり	備考
1 尾張大納言義直		1	
2 紀伊大納言頼宣		3	
3 水戸中納言頼房		5	
4 酒井讃岐守忠勝侍從		40	
5 堀田加賀守正盛		52	
6 松平伊豆守信綱侍從		61	
7 阿部豊後守忠快		59	
8 阿部對馬守重次		41	
9 伊井掃部守直孝中將		22	
10 越前守相忠昌		11	
11 松平陸奥守忠正		15	
12 佐竹修理大夫義隆侍從		29	
13 上杉彌正定勝少将		27	
14 南部山城守重直		47	
15 丹羽左京重長(長重力)		46	
16 内藤備力		67	
17 保科肥後守正之少将侍從		9	
18 酒井宮内忠俊		38	
19 松平越後守光長御位少将		10	
20 松平出羽守直政侍從		12	
21 酒井河内守		39	
22 上井遠江守		49	
23 福築美濃守利正		56	
24 井上河内守正利諸大夫		84	
25 安藤右京重長諸大夫		25	
26 高力摂津守忠房諸大夫		103	
27 水野監物忠吉諸大夫		89	
28 水井信濃守尚政		53	
29 藤堂大学守高次侍從		25	
30 小松中納言		14	
31 松平新太郎光政少将		23	
32 本多内記正勝四品		34	
33 松平相州光中		24	
34 松平阿波守忠英侍從		26	
35 松平土佐守忠義侍從		28	
36 松平肥前守定行侍從		36	
37 松平安芸守光成侍從		19	
38 松平長門守輝茂少将		20	
39 松平右京大夫		13	
40 京極刑部高和諸大夫		83	
41 小笠原右近大夫忠政諸大夫		37	
42 小笠原信濃守尚政諸大夫		42	
43 松平右衛門佐忠之侍從		18	
44 寺次兵衛晴忠		-	正保四年断絶
45 鍋島信州勝茂侍從		21	
46 立花左近		42	
47 有馬中將(忠頼)		30	
48 中川内膳久盛		60	
49 細川肥後守光尚		17	
50 堀尾陸奥乗秀少将		16	
51 森内記長継侍從		31	
52 松平鶴松		32	
53 松平越中守四品		45	
54 水野作人		65	
55 板倉高防守重宗侍從		97	
56 京極丹後守高広侍從		54	
57 亀井能登守慈正諸大夫		101	
58 古田兵部重經(恒力) 諸大夫		-	慶安元年断絶
59 小笠原忠政守諸大夫		106	
60 伊達遠江守秀宗侍從		64	
61 松平式部大夫忠次四品		32	
62 水戸三才		-	細川忠興、隠居願、正保二年死去
63 伊藤大和守		80	
64 小出大和守吉幸諸大夫		91	
65 福築淡路守諸大夫		-	慶安元年断絶
66 戸田左門		48	
67 松平丹波守		66	
68 岡部美濃守定勝諸大夫		75	
69 内藤豊前守諸大夫		93	
70 牧野右馬允四品		62	
71 石川主殿諸大夫		90	
72 本多能登守		43	
73 真田伊豆守		55	
74 奥平美作忠昌四品		44	
75 阿部備中守正成侍從		-	断絶せず
76 仙石越前守正俊		76	
77 淺野内匠長忠		77	
78 淺野因幡守		85	
79 秋田河内守俊秀(季カ) 諸大夫		88	
80 松平大和守		39	
81 青山大膳		98	
82 松平山城守忠勝		70	
83 松平岡防守諸大夫		82	
84 加藤出羽守泰貞諸大夫		74	
85 本多下総守安正諸大夫		63	
86 菅沼左近定芳諸大夫		-	断絶せず
87 山崎甲斐守諸大夫		-	明暦二年断絶
88 水谷伊勢守勝隆		105	
89 大久保加賀守諸大夫		58	
90 黒田甲州長興		-	断絶せず
91 松平内膳守諸大夫		197	
92 津輕土佐守		100	
93 相馬大膳亮		73	
94 戸沢左京正成諸大夫		69	
95 金森出雲守頼朝四品		108	
96 毛利甲州秀元宰相		-	断絶せず
97 脇坂淡路守諸大夫		78	
98 本多石見守		87	
99 有馬左衛門佐		79	
100 本多飛騨守守成重諸大夫		102	
101 松平大膳亮		-	断絶せず
102 松平若狭守		86	
103 小出對馬守諸大夫		129	
104 松平主殿		99	
105 日根織部		-	明暦二年断絶
106 堀津但馬守		-	断絶せず